講　演

看護研究の基礎

金　川　克　子
（金沢大学医療技術短期大学部教授）

1．はじめに

わが国で看護研究が何時頃から盛んに行なわれだしたのか詳細はわかりませんが，看護学が，大学課程の教育の範疇に仲間入りしたのは，昭和27年４月の高知女子大学家政学部での衛生看護学科の誕生であります。次いで昭和28年４月には東京大学医学部での衛生看護学科の設立の経緯をみれば，看護学や看護論を支える看護理論や看護研究の発展もそれらとほぼ平行していると思います。

そして，特に現行の看護制度の発足以来，看護が専門職業として認められるための基準の一つとして，実践に応用できる専門的な知識体系が必須であるとして，看護界では精力的な努力が続けられています。

最近では，看護独自のものを作りだしていくことが，看護学の将来の正しい発展及び，看護専門職の独立のために，より望ましい方向であるという趣旨で昭和56年７月に，日本看護科学学会も発足しています。

ところで，この様な過程の一方で，医療の現場では，病んでいる患者にどの様なケアをしていったらよいかと悩みながら，毎日が追いまくられているのも現状と思われます。

当石川看護研究会は，年々看護研究が盛んになる中で，病院や地域等の現場での看護活動が，科学的基盤に立って展開できる様に，又，看護の視点に立った看護研究を意図したいと思い，昭和58年に発足したものであります。

本稿は，看護研究を志向する第一歩としての基礎を模索したものです。

2．看護実践と看護研究の関連

よい看護ケアを提供するためには，対象の状況を十分に理解し，対象となる人々が健康の向上や維持，疾病の回復にむけて，日常生活をよりよく，その人らしく過ごしていくには，どの様なことが必要であるか（対象のヘルスニーズと私共は称していますが）を明確にしていくことが大切であります。したがって，日常の看護実践の中で，疑問に思ったり，改善や工夫が必要であると思われることを放置しないで，それに対する回答を出していく努力が必要です。それらは，一寸した創意工夫でできるものも多くありますが，中には文献で調べたり，自ら研究していくことによって，明らかになるものもみられます。

看護実践と看護研究の関連として，一つには，看護実践から論理を描きだしていくことの過程と，二つには，描きだした論理を実践の中で応用していくことの過程であります。前者の看護の実践から論理への過程では，さまざまな健康問題や治療，処置を必要とする患者が，生命を維持し，日常生活，社会生活を遂行していく上で障害となる事柄や状況を

明らかにしたり，それらの解決にむけて，工夫すべきケアや対応も多々あります。

これらの検討が看護研究に連なります。又一人のケースから得られた効果的なケアが他のケースにも同じような効果をもたらし，さらに多くのケースにも実証されれば，一般性のある論理となる訳です。

3．看護研究をすすめていく上で困難となるもの

看護研究の必要性が充分に認識されながらも，現実に看護の研究をすすめる上で，多くの困難性がみられます。それらのいくつかを挙げてみますと，一つには，看護の対象が生物的特性と共に，高度な精神活動や社会活動を営む人間であること。又，看護の展開が看護者と患者の相互関係に左右されることが多いので，両者の関係を動的に把握，分析する方法の修得が必要であります。

二つ目には，ケア内容の多様性と複雑性であり，ケア内容が患者の生活全般にわたるものであり，その個人のもつ複雑なニーズによって多様性のある複雑なケアが必要になってきます。又，ケアが看護者と患者の相互関係の中で，進められていく部分が多いことであり，共通性のあるケア内容を明らかにしていくことが難しい面がみられます。

三つ目には，研究活動と実践活動の間にみられるギャップであります。研究が何の為の研究か，何を意図した研究であり，それが看護にどの様に関連しているか明確化していくことが必要です。

4．看護研究の視点

看護実践を質的に高めていく様な看護研究をすすめる上で，どの様な配慮が必要であるか，いくつかの観点で考えてみます。

研究内容の面からみますと，ケアを必要とする様な状況や患者のヘルスニーズの充足につらなる様な直接的なケアの検討であります。具体的には，いろいろな状況下，環境の変化，高度な検査，処置，特殊な医療的環境（ICU，CCU など）等に置かれた時にみられる患者の反応や障害，長期療養や長期寝たきりによる患者の状態や反応などが挙げられます。

また，患者のヘルスニーズの充足は，患者の安全，安楽，もしくは，ナイチンゲールが指摘している様な，患者の生命力の消耗を最小限にしていく様な整え，または，患者のもつ能力が最大限に発揮できる様な条件を検討していくことが大切であります。

さらに，看護ケアの評価をどの様にしていくか，その方法の検討も必要であります。中でも，看護者と患者の相互関係の過程分析が挙げられる。

次に，患者のヘルスニーズの充足につらなる間接的な看護ケアの検討であります。

まずは，ケア体制の検討であり，多くの患者のケアがチームを組んでなされる中では能率的にすすめられることが大切であり，看護管理という表現で該当する部分もあります。病室での患者の配置，有効な申し送りのあり方，看護業務の分担のし方，看護チームの組み方，記録の様式・書き方，保管のし方，病室・病棟での環境管理など，数多くあります。

その他，人材の育成の学習プログラムであり，基礎教育，継続教育に必要な内容と方法の検討等が挙げられます。

そして，よい看護の実践に結びつく看護研究が遂行されるには，研究のできる体制作りであり，研究施設，研究に必要な設備，研究費，研究者の育成等であり，当看護研究会が微弱ながら，その役割の一端になればと思います。

まとめてみれば，①新しい知見を得るため ②問題や疑問を解くため ③何かのプログラム，看護基準，方法，結果などの成果を高めるため ④何かのプログラム，看護基準，方法，結果の成果を評価するため等について，研究の視点を置くことが重要と思います。

5．研究のプロセス

筆者は看護教育に入る前は，医学部公衆衛生学教室に約10年間助手として籍をおいていましたので，医学的研究――主に自然科学的方法論と考えるが――特に，疾病や異常の原因究明を中心にした疫学的研究方法を学ぶ機会が多かった。疫学[1)]とは，人間集団を対象として人間の健康および，異常の原因を宿主，病因，環境の各面から包括的に考察し，その増進と予防を図る学問です。患者にみられる問題や障害発生の要因解明には疫学的手法が参考にできるものがあります。大まかな疫学的手法は，

①発生した問題を場所，時間の側面から，詳細に記述していく記述的方法

②問題をもったケースと問題のないコントロール群間で要因の比較分析をする Case-control study

③予測された要因による実験的方法であります。

一方，看護実践は，前述の如く，患者と看護者の相互関係のプロセスの良し悪しに患者や看護者の思いや認識など，精神的作用が大きく関与しています。したがって，問題となっている現象や問題発生に関連していると考えられる要因をできるだけ客観的に把える，いわゆる自然科学的方法だけでは，看護の現象の研究には十分といえない場合があります。

それではまず，問題の発生や問題の発生に関連する要因，又は要因間の関連などを解明する研究のすすめ方を中心に述べてみます。

看護研究が一つのかたちになるまでのプロセスとしては，研究の内容にもよりますが，一般的なものを表1に示してみました。個々の詳細な解説は，別に譲るとし，最近の看護の研究論文や，専門雑誌でみられる傾向から，いくつかを挙げてみたい。

1）文献調査や活用の必要性

文献の活用は，研究をしようとする興味や関心となる領域から，研究テーマを絞る過程や，自らの研究結果を他の知見と比較したり，考察の過程などで活用される。しかし，看護の研究論文では，手近に文献が少なかったり，又文献検索の方法が不充分な為に，引用又は参考とする文献が少ない様に思われます。

表1．研究のプロセス

1．研究課題の選定
2．文献で調査
3．理論的枠組の設定
4．仮説の設定
5．変数の設定
6．母集団と標本の抽出
7．データの収集
8．データの整理
9．データの分析
10．考察
11．結論

文献より，次のことが学習できると考えられます。

①著者が研究にとり組んだ動機が何であるのか，又その動機より著者の日頃の疑問や洞察したものが理解できる。

②著者の研究動機から研究課題への組み立てを理解できる。

③著者のこれまでの研究過程や研究成果を通じて，研究の概要がわかる。

④具体的な研究のすすめ方（研究方法，対象のとり方など）がわかる。

⑤研究結果を通して，新しい知見を知ることができる。

⑥研究成果の適用や応用範囲とその限界を知ることができる。

看護に関する文献検索に主に使用するものとして表2にあげました。

2）研究デザインを確実に

(1)理論的枠組について

最近の看護の論文の中では，理論的枠組が示されているものをみかける様になりました。詳細に調べた訳ではないので断言で

表２．看護の文献検索に主に使用するもの

①医学中央雑誌
　医学中央雑誌刊行会編集発行
　1903～
　1975(317巻)～「看護学」として独立した項目
②医学中央雑誌累積版 301巻～360巻(1973,9～1978,10)
　医学中央雑誌刊行会監修：国外アソシエーツ編集,発行
　シリーズ22：看護学,リハビリテーション 1982,12刊
　シリーズ７：衛生学,疫学 1981,4～1983,2刊
　シリーズ24：東洋医学,医学史,社会医学,法医学 1983,6刊
③日本看護関係文献集
　湯槙ます監修,林滋子編
　日本看護協会出版会
　1973～
④看護関係文献抄録集
　神奈川県立衛生短期大学看護研究室編
　日本看護協会出版会
　1974,
　1975～1976(1979刊)
⑤看護関係雑誌文献目録,累積版
　日本看護協会
⑥その他雑誌等に掲載されている総目次,総索引
　（例）日本看護学会研究論文総索引 1984
⑦International Nursing Index (INI)
　American Journal of Nursing Conpany
　MEDLARS 1966～

きないが，看護の修士論文や外国の論文に特に多い気がする。これまで筆者も含めて，大部分は，明らかにしたい結果や，実証したい結果を，念頭において研究をすすめています。ただ，それらの予測が，単なるカンとか，経験によることもあろうし，仮説をたてる理論的基盤がその専門領域では，一般的であり，あえて説明しなくてもよい場合もあります。

ところで，看護の研究では，対象や方法，あるいは，研究の内容が多岐にわたっており，基盤とする概念や理論も種々あるので，表現の有無はともあれ，理論的枠組をきちんとしておくことが重要です。

(2)データの収集について

定量的，半定量的，又は質的な尺度で観察，測定，面接，質問紙，参加観察法などによってデータが収集されるが，収集すべきデータの特性によって適切な方法を選択すべきです。

看護の領域では，半定量的な順序尺度や質的な名儀尺度によるデータ収集の必要度が高い。

又，把えるデータが例えば患者の性格とか，褥創の大きさや，苦痛の程度など限られた側面だけでなく患者の疾病の回復過程や，看護婦と患者の関係のプロセスなど，時間的にも空間的にも大きい現象を一つのデータとして把える必要性もあります。

(3)データの整理，分析

収集したデータはなるべく全貌がわかる様に整理していくことが望ましい。ある問題や現象の頻度や内容を調査するいわゆる調査研究や記述的研究と，要因間の関連の有無を明らかにする研究では，データの整理の仕方が異なる。又，統計的手法を活用

していくことも重要であります。対象数が多かったり，複雑な処理をするために，最近では，コンピューターや市販のソフトが手軽に使用されることが多い。統計的知識を充分に理解しないままに，ソフトの適用を誤ることもあるので，慎重さが必要と思われます。

3）研究結果の報告

研究成果を報告する機会は看護界でも，非常に多くなっています。報告の形式も口頭での発表や活字の発表などさまざまであり，報告内容のレベルもさまざまです。看護の研究論文としては，看護の視点に立っていることが重要であることは当然でありますが，研究論文に必要な基本的条件が揃い，わかり易いことが大切です。

研究成果はできるだけ，それが他人から理解され，内容的に評価に充分堪え，そして活用されることは，研究者にとっても，喜びであり，大きくいえば，看護学に貢献するものといえます。

この論文は，昭和60年度日本看護協会東海北陸地区（北陸）看護研究学会の特別講演の「看護の実践と看護研究」と，平成元年6月25日の石川県看護協会研修会での講演「看護研究の基礎」を基に整理加筆したものであります。

引　用　文　献

1）重松逸造他：疫学とその応用　南山堂，東京，1966